

1 組成と分布

衛気も営気と同様、主に水穀の精気から化生される。

活動性が高く、動きが非常に速いという特性があるために、衛気は脈管の拘束を受けずに、皮膚や筋肉の間を流れ、盲膜を温め、胸腹部に散る。

2 主な機能

衛気には三つの作用がある。一つは、**体表を保護して外邪の侵入を防ぐ**ことである。もう一つは、**臓腑や筋肉、皮毛を温める**ことである。さらにもう一つは、**腠理の開闔を調節して汗の排泄を制御し、体温を一定に保つ**ことである。衛気の機能を述べたものとして、『靈枢』本藏篇に次のような一節がある。「衛気は分肉を温め、皮膚を満たし、腠理を肥し、開闔を主る」「衛気が和せば、分肉は解利し、皮膚は潤い、腠理は緻密である」

営気も衛気も、ともに水穀の精気から作られるが、両者には営気は「脈中」にあり、衛気は「脈外」にあるという違いがある。『靈枢』営衛生会篇に「営気は脈中にあり、衛気は脈外にある、営気は絶えず全身をめぐる」とある。営気は内を守るので陰に属し、衛気は体表で防衛するので陽に属する。営気と衛気は常に協調し合う必要がある。営衛の調和が保たれてはじめて、正常な腠理の開闔や体温の維持、昼に活発で夜に眠くなる生活のリズム、さらに外邪に対する防御能力の維持が可能となる。営衛の調和が崩れた営衛不和の状態では、悪寒や発熱、無汗あるいは多汗、昼に活力がなく夜眠れない、外邪に犯されやすいなどの症状が現れる。

人体の気には、以上に述べたもの以外に「臓腑の気」「経絡の気」などがあるが、いずれも元気に由来するものである。各臓腑・経絡を構成する最も基本的な物質であり、個々の生理機能を推動し維持している。

「気」には他にも多くの意味がある。中医学においても、本章で述べた「人体を構成する気」以外にさまざまなものに用いられる。例えば、飲食物から吸収した栄養物質を「水穀の精気」あるいは「穀気」といい、体内に存在する異常な水液を「水気」という。また発病の原因となるものを「邪気」といい、身体の正常な生理機能や疾病に対する抵抗力を「正気」という。中薬の寒・熱・温・涼からなる四つの性質と作用は「四気」である。

第2節 血

1. 血の基本概念

血は人体をめぐる赤い液状の物質である。人体を構成する基本的な要素であり、生命活動を維持するために欠かすことができない。血は栄養と滋潤の作用をもち、脈中を循環することでその生理機能を発揮している。何らかの原因により出血し、血が脈外に漏れた場合、脈外の血は離経の血と称される。また、脈は血の漏出を防ぐ機能があるために血府と称される。

2. 血の生成

血を構成する成分は主に営気と津液である。営気も津液も、脾胃の運化によって得られる水穀の精微から作られるから、血は脾胃によって生成される。脾胃は「気血生化の源」である。『靈枢』決気篇に「中焦（脾胃）が、気を受け、汁を取り、赤く変化させたものが血である」とある。よって、脾胃の状態や摂取する飲食物は、血の生成に影響をおよぼす。長期にわたる脾胃の機能失調や飲食物の摂取不足は、血の生成不足の原因となり、血虚を引き起こす。

営気は血が生成される段階で津液に変化する。『靈枢』邪客篇に「営気は、津液を分泌して脈中に注ぐ。それは化して血となり、四肢を栄養し五臓六腑に注ぐ」とある。血の生成には肺も関与する。営気は肺を通じて脈に注ぎ、血の構成成分となる。また、脾胃の運化によって得られる水穀の精微も、肺に注がれた後、血の成分となる。『靈枢』営衛生会篇に「精微は、上の肺脈へ注がれ化して血となる。身体を生かすのでこのうえなく貴重であり、経脈の中めぐを行る」とある。

一方、血の生成には腎も関係する。腎に貯蔵された精も、血の重要な構成成分となる。精は腎に貯蔵され血は肝に貯蔵されるが、精と血の間に相互資生と相互転化の関係があるため、腎に精気が満ちれば肝も養われて血が充実し、肝に貯蔵される血の量が十分であれば血が精となり腎に貯えられる。**精と血は源が同じである**とするこのような考え方を、「**精血同源**」という(図3)。

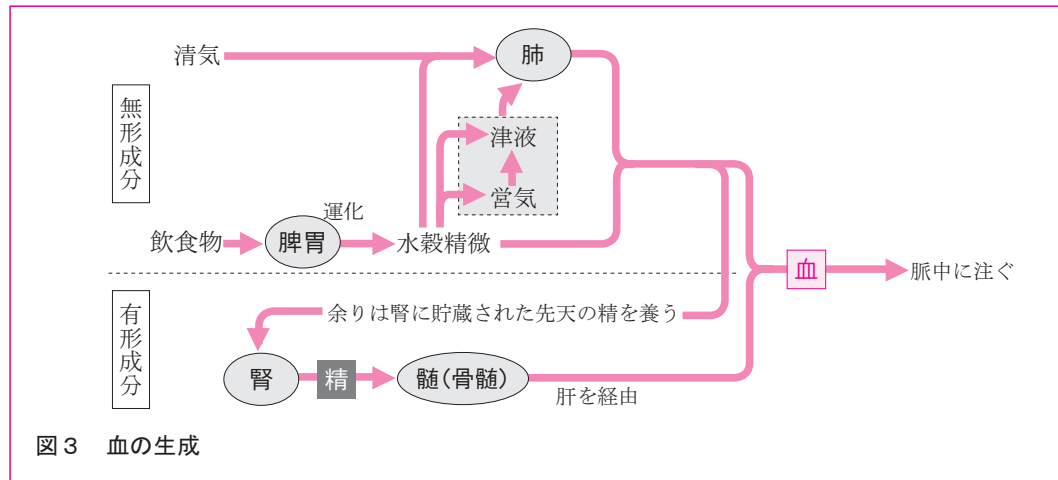


図3 血の生成

3. 血の機能

血には、全身を栄養して滋潤する作用がある。血は全身を絶えず循環し、臓腑や組織、器官を栄養・滋潤することで、人体の生理機能を維持している。『難経』二十二難に「血は濡を主る」とある。人体の感覚や運動などの機能も、血の栄養と滋潤の作用によって維持されている。血の栄養と滋潤の作用が正常であれば、顔色は紅く潤い、筋肉は充実し、皮膚や毛髪は潤沢で艶があり、感覚が鋭敏で運動能力も俊敏である。もし血の生成が不足したり、長期間にわたり血が消耗されたりすれば、眩暈、羞明、顔色萎黄、脱毛、皮膚の乾燥、四肢末端の痺れなど、血虚による症状が現れる。『素問』五臓生成篇に「肝は血を受けて見ることができ、足は血を受けて歩くことができ、掌は血を受けて握ることができ、指は血を受けて摘むことができる」とある。

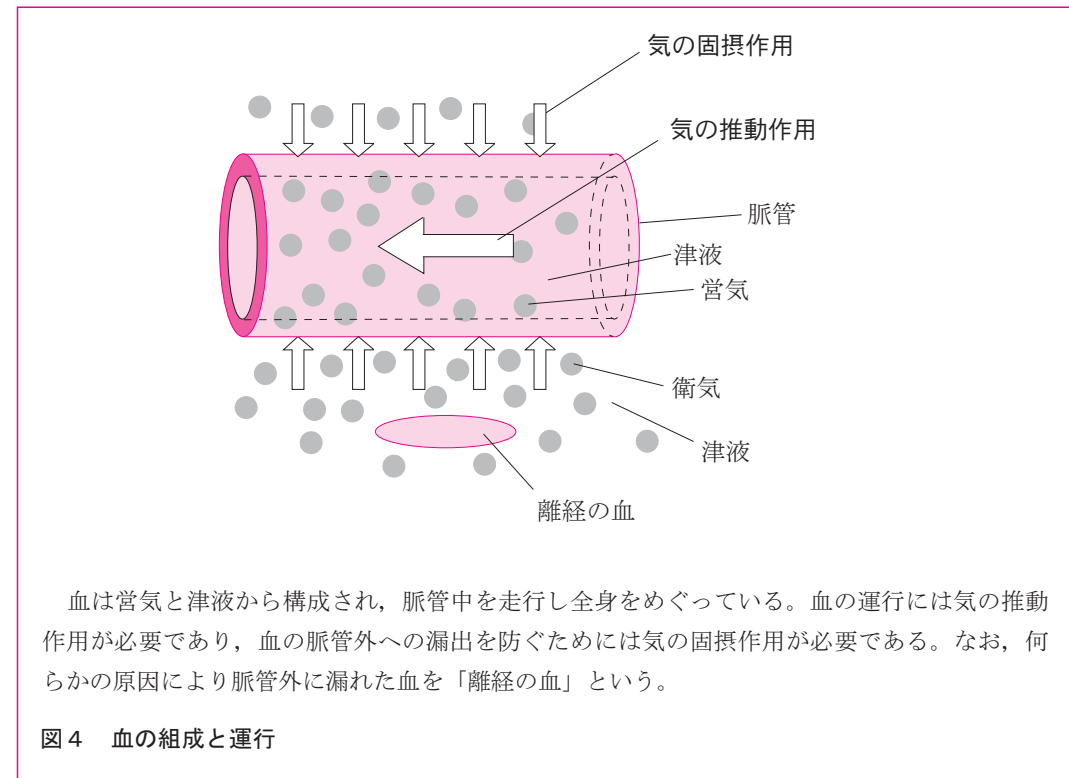
血は精神活動にとっても欠かせない物質である。精神が充実し意識が明瞭であり、感覚が鋭敏で活動が敏速であるためには、血気が満ち血脈が調和し、血の流れも順調でなければならない。『靈枢』平人絶穀篇に「血脈が順調に流れてこそ、精神も健全である」とある。もし血虚や血熱あるいは血の循環障害があれば、精神衰弱、健忘、多夢、不眠、煩躁(イライラ)などの症状を呈し、著しい場合には、神志恍惚、動悸、不安、譫語、昏睡などの症状が現れる。

- 血の生理機能
- 栄養・滋潤作用
 - ・全身を栄養・滋潤し、人体の生理機能を維持する
 - 精神活動の本となる
 - ・精神活動(神志)の物質的な本となる

4. 血の運行

血は、全身の各臓腑や組織、器官に必要とされる栄養を供給するために、脈管の中を走行し絶えず全身をめぐる。血の循環系統は、主に心・肺・脈によって構成され、飲食物の摂取によって得られた水穀の精微は、血中に注がれ循環系統に入った後、全身に行きわたる。

血そのものは陰に属し静を主るので、単独では動くことができない。血の運行には気の推动作用が必要である。また、血が脈管外に漏れず脈管の中を運行するためには、気の固摂作用も必要である。血の運行が正常であるためには、気の推动作用と固摂作用の間に調和と平衡が維持されなければならない(図4)。



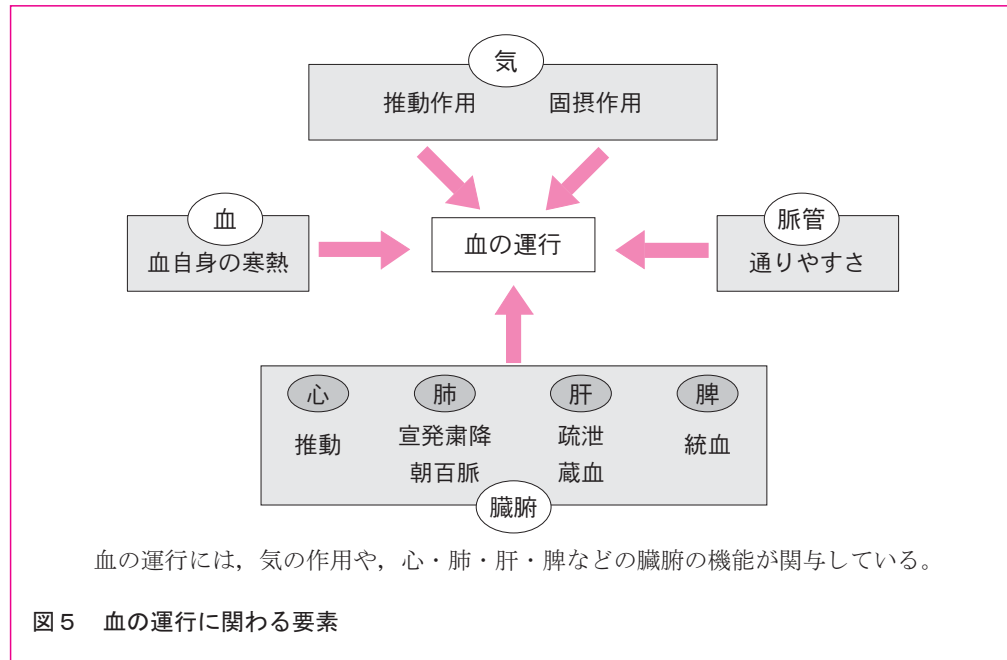
血は營気と津液から構成され、脈管中を走行し全身をめぐる。血の運行には気の推动作用が必要であり、血の脈管外への漏出を防ぐためには気の固摂作用が必要である。なお、何らかの原因により脈管外に漏れた血を「離経の血」という。

図4 血の組成と運行

血の運行には身体各臓腑の機能も関与している。その中心が心の拍動による推动である。『素問』痿論篇に「心は身体の血脈を主る」とあり、『医学入門』に「人の心が動けば、血は諸経をめぐるとある。また、血の運行には、肺の宣発作用と百脈が朝する作用、肝の疏泄機能なども重要な役割を担っており、血を固摂するためには、脾の統血機能や肝の蔵血機能も欠かせない。よって血が順調に運行するためには、心の機能のみならず、肺・肝・脾など他の臓腑の機能も正常である必要がある。また、脈管の通りやすさや血そのものの寒熱も、血の運行に影響をおよぼす。『素問』調經論篇に「血気は、温を喜び寒を嫌う、寒では滞って流れず、温では滞りが解除されて流れる」とある(図5)。

もし血の運行を促進する要素が過剰であれば、血の運行は速くなる。血を固摂する作用が減弱

すれば、血は脈外に漏れ出血する。何らかの原因により血の運行が遅くなれば、血は流れにくくなって滞り、血瘀などの病理変化を生じる。



第3節 津液

1. 津液の基本概念

津液とは、体内の正常な水液の総称である。胃液や腸液、鼻水、涙など、あらゆる水液がその概念に含まれる。気血同様、人体を構成する基本物質であり、生命活動を維持するために欠かすことができない。

津と液は、性状や機能、分布する部位の違いから、別のものとして扱われる。一般に、性質が希薄で流動性が高く、皮膚や筋肉、孔竅に分布し、血脈の中に注いで滋潤作用を発揮するものを津といい、性質が濃厚で流動性が低く、骨や関節、臓腑、脳、脊髄に注いで滋養作用を発揮するものを液という。『靈枢』五癰津液別篇に「津液は、それぞれその道を走る。三焦より気が出て、筋肉を温め皮膚を満たすものを津、流れても行らないものを液」とある。津と液は、いずれも飲食物をもとに脾胃の運化機能によって作り出される。

津と液は互いに転化しうるために、あわせて津液と称されることが多い。ただし、「傷津」や「脱液」などの病理状態を弁証するときは、両者を別のものとして扱う必要がある。

2. 津液の生成・輸布と排泄

津液の生成、輸布および排泄には、複数の臓腑が関わっている。津液は、飲食物をもとに脾胃の運化によって作り出され、脾の散精作用と肺の通調水道作用によって全身に運ばれる。また、三焦を通り、気とともに体内を昇降出入しながら循環し、汗や尿あるいは呼気中の水分として体外へ排泄される。津液の生成、輸布、排泄をまとめた一節に次のようなものがある。「飲が胃に入ると、精気が溢れて脾に昇り、脾気に散じられて肺に注がれ、水道を通して膀胱へ降りる。水精は四方へ分布し五経を行る」(『素問』経脈別論篇)

1 津液の生成

津液は、飲食物をもとに脾胃の運化機能によって作り出される。飲食物は胃に入った後、小腸へ送られて清と濁を分別されるが、その清の部分が脾に送られて津液のもととなる。

2 津液の輸布と排泄

津液の輸布と排泄には、肺・脾・腎の三臓が関わる。すなわち津液は、肺の宣發肅降作用、脾の転輸作用、腎の気化作用によって輸布され排泄されている。また、津液は代謝され体内をめぐる際に、三焦を通路としている。

① 肺の宣發肅降作用

津液は肺の宣發作用によって全身の体表に輸布される。また、代謝された津液が汗となって